

日本広報学会「大学広報とスポーツ」研究会

**2003～2004 年度報告書**

2005年5月

主査：大同工業大学教授 川戸和英 編

## は じ め に

本報告書は、日本広報学会「大学広報とスポーツ」研究会の2003年度から2004年度まで2年間の活動内容をまとめたものである。

本研究会は、1999年から2000年まで阪南大学貴多野乃武次教授が主査の「企業スポーツ広報」研究会と、2001年から2002年まで関西学院大学芝田正夫教授が主査の「企業とスポーツの関わり」研究会の後を受けて、テーマを「大学広報とスポーツ」に展開して、2年間に合計12回開催した。

周知の通り、急速な少子化の進行に伴い来る2007年には大学全入時代が訪れ、短期大学のみならず多くの4年制大学が淘汰されるといわれる中、閉校に追い込まれた私立大学の例が報告された。また国公立大学が独立法人化されて、自立経営を迫られることにより、国公立大学や私立大学の区別なく、大学の経営や将来展望に関して、研究会開催中のこの2年間でもまさに風雲急を告げる動きがでてきた。その中で大学広報の役割と重要性が各大学で急速に認識され始めている。広報の巧拙、展開の積極性、消極性によって、社会において認識を高めた大学が出る一方で、相変わらず低迷している大学も多くあるなど、大学間格差がついてきてはいるものの、全体としては大学広報の現状はまだまだ発展の緒にすぎたばかりである。

その中で大学スポーツに関しては、箱根をはじめとする駅伝競走やラグビー選手権などを除いて、テレビや新聞が報道することが過去に比べて相当少なくなった。特に大学サッカーは、「Jリーグ発足により骨抜きにされてしまった」といわれるほどに影が薄くなった。また大学の中でも、テレビが報道するスポーツの選手を積極的に集め、「テレビ中継による売名効果」を狙う大学が増える一方、あくまで大学生としての知力養成を第一に掲げ、あからさまな大学の売名行為を慎む大学など、大学スポーツに関して大学の対応も分極化の様相を呈している。

本研究会では、上記の問題意識を基に、大学広報の実情、大学スポーツとスポーツ広報の実情、そしてアメリカの大学スポーツについてもゲストスピーカーを招いて講演してもらい議論を展開した。2年間の研究会内容は以下の通りである。

第1回 2003年6月6日(金)

研究会の目的、研究会実施計画について議論、および確認

第2回 2003年7月5日(土)

「大学アメリカンフットボールと大学広報」

報告者：Kent Baer氏（ノートルダム大学アメリカンフットボールコーチ）

コーディネーター：古川 明氏（関西アメリカンフットボール協会理事長）

- 第3回 2003年9月5日(金)  
「大学広報とスポーツ」  
報告者：新村 佳史氏 (ハドルタイム主宰)
- 第4回 2003年12月11日(木)  
「大学スポーツの役割～阪南大学サッカー部の場合～」  
報告者：須佐徹太郎氏 (阪南大学流通学部教授、阪南大学サッカー部部長)
- 第5回 2004年3月18日(木)  
「大学広報の現場より－大学広報“関学－立命戦”！」  
～関西学院大学と立命館大学、広報の現状とスポーツ～  
報告者：関西学院大学広報室長 古森 勲氏；立命館大学広報課長 西川幸穂氏
- 第6回 2004年6月10日(木)  
「問題提起：大同工業大学広報活動の現実と課題」  
報告者：川戸 和英氏 (大同工業大学)
- 第7回 2004年7月8日(木)  
「大学における「戦略広報」～星城大学のケース～」  
報告者：伊吹 勇亮氏 (京都大学大学院経済学研究科博士課程)
- 第8回 2004年9月17日(金)  
「早稲田大学と杉並区のスポーツを通じてのコラボレーションについて」  
報告者：小野 豊和氏 (社団法人日本在外企業協会 業務部部長)
- 第9回 2004年10月22日(金)  
「大学運動部のあり方と運動選手の教育」  
報告者：竹田 正樹氏 (同志社大学文学部助教授・保健体育室)
- 第10回 2004年11月19日(金)  
「教育産業と広報」  
報告者：上野 弘子氏 (広報メディア研究所代表)
- 第11回 2004年12月17日(金)  
「大学スポーツの現状と課題」  
報告者：横山 勝彦氏 (同志社大学法学部教授)
- 第12回 2005年3月12日(土)  
「大学広報とスポーツ研究会」最終座談会  
・発議者 伊吹 勇亮氏 (京都大学大学院経済学研究科博士課程)  
・座談会司会 貴多野乃武次氏 (阪南大学国際コミュニケーション学部)  
・録音、座談会抄録 名取 千里氏 (ティーオーエー)

以上、12回の本研究会で報告・議論された内容・骨子については、本報告書巻頭論文で、

伊吹勇亮氏が簡潔に纏めているし、名取千里氏にまとめていただいた座談会抄録に詳しいのでそれを参照していただくとして、ここでは、本研究会で報告・議論されたテーマについて報告する。

第1は「大学広報について」である。広報誌の作成や大学説明会（オープン・キャンパス）の開催など、従来からも大学広報は行われてきたが、ここ数年では、大学版戦略広報とでも言うべき、建学理念・経営戦略・広報の3つが有機的に連動したものが増えてきている。研究会においても、大同工業大学や星城大学の例が紹介され、様々な議論が繰り広げられた。また、近年さらなる発展を遂げている教育産業における広報活動の光と陰についても報告がなされた。

第2は「大学スポーツについて」である。阪南大学や同志社大学、関西学院大学のケースをもとに、大学スポーツにおける最新の動向について、就職状況から「学生」との両立の問題まで、幅広く議論が行われた。特に、スポーツ推薦等で入学を許可した生徒に対して、どのように学業を行わせるか、一般学生との「温度差」をどのように解消していくかが、大きな論点であった。

第3は、大学広報とスポーツとの連動である。箱根駅伝や大学アメフトに代表されるように、大学スポーツは大学広報のツールとして大学のブランド認知の向上に利用されてきており、今日でもその流れは続いている。しかし、大学を取り巻く環境が変化するにつれ、大学広報と大学スポーツとの関係もまた変化してきており、従来通りの捉え方では把握できない点も増えてきている。

研究会では従来型の大学広報に対する問題提起がなされた後、アメリカ・ノートルダム大学の実例紹介や、関西学院大学・立命館大学における大学広報と大学スポーツとの連動について報告がなされた。また、早稲田大学によるWASEDA CLUBの設立に関する報告では、大学広報と大学スポーツとの新たな関係構築の先端事例が紹介された。

このような研究報告を受けて、今後の論点として次の点が指摘できよう。すなわち「大学やスポーツを取り巻く環境の変化が、大学広報や大学スポーツにどのように反映しているか」、という点である。そしてこの論点は更に以下の二点から考えられる。

第1は、大学を取り巻く環境の変化は、結局どのようなものであるのかということである。大学を取り巻く環境が変化し、その変化に適応するために大学もその戦略や組織形態を変える、そしてその結果、大学広報が変わる。これが、川戸・伊吹（2004）の言う「大学における戦略広報」の基本的なフレームワークである。ならば、大学広報における最近の変化を捉えるためには、まず大学の戦略の変化を捉える必要があるし、そのためには、大学を取り巻く環境そのものの変化を捉える必要がある。もちろん、如何に環境が変化しようとも変わることはない大学広報（の部分要素）も考えられる。ならば、環境変化とは関係のない部分要素とはどのようなものであるのかということも明確にする必要が出てくる。大学経営に関する専門的な研究がそもそも少ないことを考え合わせるならば、これら

のロジックをきちっと通すことが、まずは望まれているだろう。

第2は、「スポーツの目的とはなにか」を改めて問う必要がある、ということである。野球において特に顕著にみられるように、大学スポーツはプロスポーツ予備軍であるという見方が一般的になりつつある。このことが常態化すればするほど、確かに従来型の大学広報としては効果が高まるかもしれないが、一方で教育機関としての効果の低下や一般学生との「温度差」が問題となってきている。そもそものスポーツの目的を明らかにし、その上で行いうる大学広報とは何かを考える必要が出てきているように思われる。

この第2の点は、大学をビジネス主体として（のみ）捉えることの是非にも話が繋がるであろう。教育機関としての矜持を保った形での「スポーツを利用した大学広報」は必要ではあるが、さりとて収入を得るための広報活動としてはやむをえないスポーツの利用法も出てきてしまう。実は、このことは大学に限らず一般的にNPOに共通する問題である。NPOという用語は「非営利」、つまり、営利を目的としないということを謳っているにすぎず、経済活動全般が否定されているものではない。しかし、大学に限らずNPOと呼ばれる組織に共通につきまとうイメージは、銭勘定とは無縁のクリーンな世界である。このとき、NPOが銭勘定に汚いことがわかるとネガティブなイメージがつきまってしまう。このアンビバレンスな関係を如何にうまく共存させていくか、このことを大学広報を事例として解き明かすことができるならば、「大学」や「スポーツ」という領域にとどまらず、広くコミュニケーション一般の問題に対してもインプリケーションを出せるのではないかと考えられる。

以上、2年間で12回にわたる「大学広報とスポーツ」研究会は、様々な成果と新たな課題を浮かび上がらせて終えることができた。この成果が大学広報、大学スポーツを考える上での一助となれば幸甚である。

いつもあたたかくご支援いただいた本研究会のメンバー諸氏と、有意義なご報告をいただいたゲストスピーカーの皆様に、主査として心から厚くお礼を申し上げる次第である。

2005年5月31日

主査 川戸和英

# 目 次

はじめに

巻頭論文

大学広報の現状と「従来型スポーツ広報」の限界

長岡大学（京都大学大学院） 伊吹 勇亮 …………… 1

大学におけるスポーツ活動と広報

関西学院大学 芝田 正夫 …………… 10

米国NCAAと大学アメリカンフットボールから学ぶこと

関西アメリカンフットボール協会 古川 明 …………… 17

神戸・阪神間 ヴォーリズの建築とスポーツ

兵庫県立芦屋高等学校 高木 應光 …………… 21

早稲田大学と杉並区（東京都）とのスポーツを通じての  
コラボレーションについて

(社)日本在外企業協会 小野 豊和 …………… 33

大学スポーツの伝えるべき本質

ハドルタイム 新村 佳史 …………… 43

座談会「大学広報とスポーツ」

コーディネーター 川戸 和英

出席者 研究会メンバー

記録者 名取 千里（ティーオーエー） …………… 46

「大学広報とスポーツ」研究会メンバー／編集後記 …………… 65